昭和学士会誌　第80巻　第5号〔396-421頁，2020〕

原　著

性的マイノリティに対する大学生の意識と態度：第3報

―3か年のアンケート調査のまとめと提言―

須長　史生*[1)]　小倉　浩[1)]　正木　啓子[2)]
倉田　知光[1)]　堀川　浩之[1)]

抄録：本研究は，2016年度から2018年度の3か年にわたって実施した「インターネットを活用したセクシュアル・マイノリティに関する学生の意識調査」の2018年度分実施内容に関する結果の報告である．すなわち，本論文は「セクシュアル・マイノリティに対する大学生の意識と態度：第1報」(須長他［2016］）および「性的マイノリティに対する大学生の意識と態度：第2報」（須長他［2017］）の続編であるとともに，特に3か年分の調査結果を俯瞰してこれまでに得られた知見をまとめたものである．本研究の目的は18歳から20代前半の男女の，性的マイノリティに対する意識や態度を明らかにすることである．調査対象は2016年度，2017年度と同様に，首都圏の医療系A大学一年生とした．3回目の調査である2018年度においては，在籍学生数598名に対して，453名（男子136名，女子315名，その他2名）からの回答が回収され，回収率は75.8％であった．プライバシーの確保と回収率の向上のために，前2回の調査と同様インターネットを活用し，スマートフォンを用いたアンケートに回答する方法で調査を実施した．アンケート回答の集計結果から得られた，主要な知見を列挙する．①性的マイノリティに関する正しい知識を有している割合は2017年度と比較して向上した．②性的マイノリティに関する正しい知識を身に付けたいと考える学生の割合は3か年を通じて増加している．③身近に存在する同性愛者（同じ大学の人，きょうだい）に対する嫌悪感は3か年を通じで漸減傾向にある．本報告では，上記の単純集計から得られる知見以外に，3か年分の回答に対して実施した主成分分析の結果から，性的マイノリティに対する意識や態度における特徴的な応答を抽出し，学生像の把握を試みた．また，戸籍上の性別と性的マイノリティに対する意識や態度に何らかの相関があるかという問いに対しても，統計的な解析を実施した．これらの結果も併せて報告する．

キーワード：性的マイノリティ，客観的知識，性的偏見

緒　言

本論文は，2016年度から2018年度にかけてA大学一年生を対象として行った性的マイノリティに関する意識調査の結果報告の第3報である．第1報，第2報においては，各年度での質問紙（具体的にはオンラインアンケート）回答を分析し，その結果を全国規模で行われた各年齢層の回答の傾向と比較することにより，近年の大学生の性的マイノリティに対する意識の特徴や，医療系大学であるA大学学生の特徴について議論した．本報告は，第1報，第2報と同様に2018年度の調査によって得られた回答の特徴を報告するだけにとどまらず，2016年度から2018年度の3か年にわたって行ってきた調査結果を統一的な視点でまとめる機会としたい．そのために，特に以下の2つの問題意識を持って分析，議論を行っていく．

(a) 性的マイノリティに拒否反応を示す学生がど

[1)] 昭和大学富士吉田教育部
[2)] 昭和大学学事部
*責任著者
〔受付：2020年3月21日，受理：2020年4月7日〕

の程度存在するのかを明確にする

（b）少数とは言え一定の比率で存在するであろう上記拒否反応を示す層について，その特徴を明確にする

上記（a），（b）についての知見が得られれば，これらを材料として，性的マイノリティと拒否反応層との共生，共存のための方策を考えることが可能となる．そのために，2016年度から2018年度のデータを総合的に分析し，より確度の高い安定した情報をもとに（a），（b）の問題を考えていく．

研究方法

1. 調査概要

本調査は，筆者らが2016年度，2017年度に行った調査結果（以下，2016年度調査，2017年度調査と示す）と同様に，首都圏の医療系A大学の一年生を対象に行われた．2016年度，2017年度において調査の対象であった学生はほぼ全員が進級しているため，調査対象者そのものは異なるが，属性は2016年度，2017年度と同様であると捉えることができる．

調査対象者の概要を記す．調査時のA大学の一年生の在籍数は598名（男子209名，女子389名）であり，有効回答数は453名（男子136名，女子315名，性別未回答2名），回収率は75.8%（男子65.1%，女子81.0%）であった．これは2016年度調査の回収率76.9%（男子66.2%，女子82.4%），2017年度調査の回収率76.6%（男子66.8%，女子80.7%）と比較して同程度の数字であるといえる（図1）．

また，本調査では，2016年度調査から継続して用いている中核的な設問に加えて，2017年度調査で新たに加えた「ジェンダー規範」や一般的な「行動倫理」について問う設問も継続して用いている．

2. 情報収集方法

情報収集方法は，2016年度調査，2017年度調査を踏襲して行われている．すなわち，Webサイト上に表示されるアンケートに各個人が回答を入力する方法で調査対象者の回答を収集した．この方法を採用する利点（回答収集過程の自動化・省力化，情報管理責任者の負担軽減，情報漏洩の危険性の低減など）の詳細については，［第1報］[1]［第2報］[2]を参照していただきたい．

情報収集は，2018年10月29日第1時限～第4時限の人文社会系の必修科目授業終了後の休み時間に行った．実施前の事前説明において，協力は全くの自由意思であり，協力しないことによりいかなる不利益も被る可能性がないこと，アンケート回答は個人が特定されない方法で処理されることを説明した点も，2016年度調査，2017年度調査と同様である．

一方で，今回の調査は2017年度調査とは同じ条件であるが，2016年度調査とは異なる点があり，比較する際に注意しなければいけない．それは，2016年度調査においては，情報収集が差別や偏見を主テーマとして扱った人文社会系の授業の直後に行われたため，その回答が（人権や偏見に対する意識の覚醒を通じて）直前の授業の影響を受けている可能性があるということである．よって，2017年度調査以降，上述した点に配慮し，調査実施直前の授業の影響を受けない条件下で行われている．

なお，この調査は，昭和大学の「医学部における人を対象とする研究等に関する倫理委員会」における審査・承認（受付番号2073，課題名「インターネットを活用したセクシュアル・マイノリティに関する学生の意識調査」）を得て行われた．

結　果

1. 単純集計

本節では，本調査の設問11項目中の3項目（問9.「戸籍上の性別」，問10.「戸籍上の性別への違和感」，問11.「セクシュアリティ」）を除いた8項目において，これらをトピックごとにまとめ，調査結果を掲載する．トピックは，①「客観的知識」②「情報を共有する相手と取得手段」③「接触機会」④「身近な人に対する嫌悪感」⑤「友人（同性）からのカミングアウト」⑥「同性愛に関する見解」⑦「偏見に関する見解」の7つに分類された．設問には，全国調査[3]と同じ設問や全国調査に一部加筆修

年度		2016年度	2017年度	2018年度
学生在籍数（調査時）	男子	207	193	209
	女子	364	388	389
	合計	571	581	598
回答数	男子	137	129	136
	女子	300	313	315
	その他・未回答	2	3	2
	合計	439	445	453
回収率		76.9%	76.6%	75.8%

図1　2016年度～2018年度実施アンケート概要

正を加えた設問，独自に加えた設問がある．また，3か年を通して用いた設問と2か年を通して用いた設問，1か年のみ用いた設問がある．詳細については，以下にてトピックごとの報告の中で述べる．

1）客観的知識

本調査では，性的マイノリティに関する正しい知識の習得率について，問4において5つの設問を設定した．図2に集計結果を示す．

問4の5項目の中で，全国調査でも実施しており，本調査において3か年通して実施した設問である問4.2，問4.3の2項目に注目して，その調査結果の経時変化をみていく．

問4.2「日本では同性愛は精神病とされる」は，全国調査においても実施された設問を採用している．日本精神神経学会が1995年にICD-10（国際疾病分類第10版）の基準に照らし，「同性愛（同性に対する性的指向）」を「精神異常」とみなさないという判断に基づき，ここでの正解は「正しくない」となる．

結果，本調査の正解率は63.1%となった．これを2017年度調査の正解率60.0%と比較すると3.1ポイント高く，2016年度調査の正解率73.3%との比較では10.2ポイントの低下となった（図3a）．また，本調査の正解率は，全国調査の学歴別での正解率において「専門・専修学校卒」の正解率59.9%より高く，「短大・高専卒」の正解率70.0%，「大学・大学院卒」の正解率68.5%より低い結果となった．

問4.3「日本では，戸籍上の性別を変えることができる」は，全国調査においても実施された設問を採用しており，法律について聞いている．これについては，2003年に成立し，2004年から施行されている「性同一性障害特例法」に依拠すると，ここでの正解は「正しい」となる．

結果，本調査における正解率は56.1%となった．これを2017年度調査の正解率54.6%と比較すると1.5ポイント高く，2016年度調査の正解率62.4%との比較では6.3ポイントの低下となった（図3b）．また，本調査の正解率は，全国調査の学歴別での正

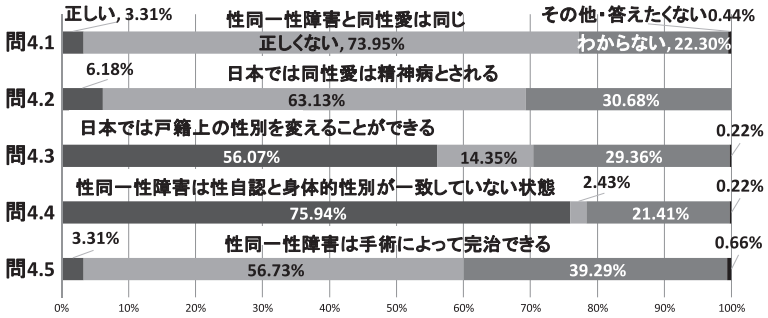

図 2　客観的知識に関する集計結果

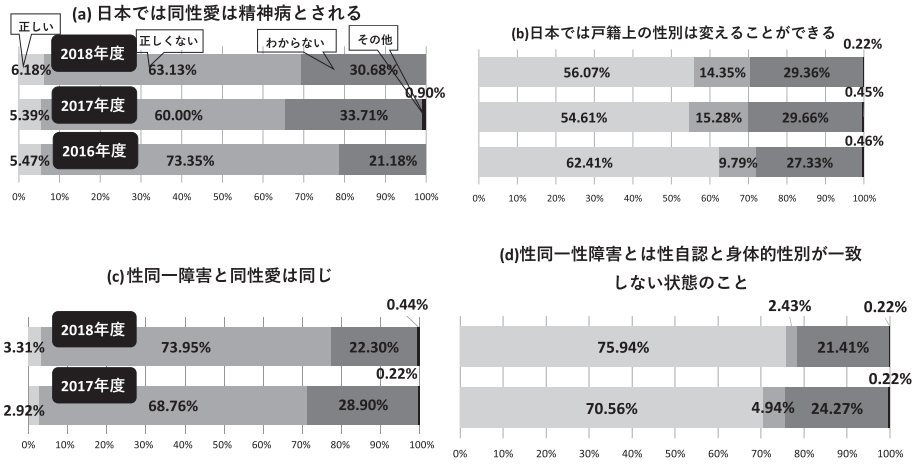

図 3　性的マイノリティに対する客観的知識正解率の経時変化

解率において「専門・専修学校卒」の正解率39.4%，「短大・高専卒」の正解率38.3%，「大学・大学院卒」の正解率38.1%と比較してもかなり高い結果となった．

続いて，2017年調査と本調査の２か年通して行った設問である問4.1，問4.4にも注目したい．

問4.1は「性同一性障害と同性愛は同じである」ことについて聞いている．ここでは，性同一性障害は個人の性自認が生物学的な性別とずれていることであり，また，同性愛は恋愛の対象の性別が同性であることを示していることから，これらは異なる概念であり，正解は，「正しくない」となる．

結果，本調査の正解率は74.0%となった．これを2017年度調査の正解率68.8%と比較すると5.2ポイント高い結果となった（図3c）．

問4.4「性同一性障害とは性自認と身体的性別が一致していない状態につけられた疾患名である」は，性同一性障害に関して聞いている．この設問については，2013年に改訂された米国精神医学会が定めた診断基準であるDSM-V（精神障害の診断と統計マニュアル）では，「性別違和」という用語を用いているが，性同一性障害とは，生物学的性別（sex）と性別に対する自己意識あるいは自己認知（gender identity）が一致しない状態に対して付けられた診断名であることから，正解は「正しい」となる．

結果，本調査の正解率は75.9%となり，2017年度調査の正解率70.6%と比較すると5.3ポイント高くなった（図3d）．

2017年度調査と本調査結果（問4.1，問4.2，問4.3，問4.4）の４つの設問の正解率を比較すると，1.5～5.3ポイントの範囲で正解率が向上し，平均すると3.8ポイント本調査の正解率が全ての設問で高くなっていた．このことから，性的マイノリティに関する客観的知識を正しく身に付けた学生が増加していることが推測される（図3a–d）．

加えて，問５では「あなたは，同性愛，性別を変えた方，性同一性障害などについて正しい知識を身につけたいと思いますか」と，性的マイノリティについて正しい知識を身につけたいか，学生の知識習得への意欲についても聞いた．「とてもそう思う」，「そう思う」と肯定的な回答を足すと83.9%となり，2017年度調査は79.1%，2016年度調査は77.0%であることから，正しい知識習得への意欲については，年々高まっていることが推測される（図4）．

2）情報を共有する相手と取得手段

性的マイノリティに関する情報を共有する相手については，問2.「あなたがこれまでに性的マイノリティに関して話をしたことがある人は誰ですか．当てはまる人全てにチェックを入れて下さい（複数回答可）」において聞いている．

結果，複数回答の中で最も多い回答は「友人」204人（45.0%），次いで「いない」199人（43.9%），「母親」106人（23.4%）の順となり（図5a），これは2016年度調査結果（「友人」202人（46.0%），「いない」177人（40.3%），「母親」119人（27.1%））の順および割合とほぼ同程度であった．

情報の取得に関しては，問3.「あなたは，テレビ，新聞，書籍，雑誌，ラジオ，マンガ，インターネットなどで，同性愛，性別を変えた，性同一性障害などが扱われているのを見聞きしたりしたことがありますか．当てはまるもの全てにチェックを入れて下さい（複数回答可）」において聞いている．

結果，「メディアで見聞きしている」割合は総数の95.6%であり，これは2016年度調査（92.7%），全国調査の20–30代の割合（92.2%）とほぼ同程度であった．本調査において，もっとも多く見聞きされていたメディアは，「テレビ（報道・教養番組）」334人（73.7%），「テレビドラマ・映画」211人（46.6%），「テレビ（娯楽番組）」185人（40.8%）の順となった（図5b）．これは2016年度調査結果（テレビ（報道・教養番組）」277人（63.1%），「テレビ（娯楽番組）」208人（47.4%），「テレビドラマ・映画」152人（34.6%））と比較して順位は２位と３位が逆となり，１位の「テレビ（報道・教養番組）」の割合が本調査では10.6ポイント高くなる傾向にあった．

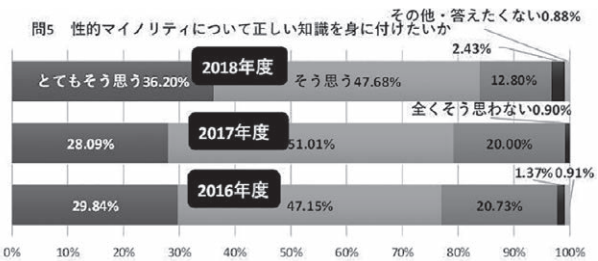

図４　性的マイノリティに関する客観的知識習得意欲の３か年の推移

「情報を共有する相手」と「取得手段」に関する集計結果は複数回答可としているため，各項目の回答数を回答者総数で除した結果を割合として示した（図 5）.

3）接触機会

問 1 では，「あなたの近しい友人や知人，親戚や家族など身近な方に以下に挙げる人はいますか．同性愛者（問 1.1），性同一性障害の人（問 1.2）」と性的マイノリティの人との接触機会について聞いている.

結果，同性愛者については，「いる」8.0%，「そうかもしれない人がいる」8.4%となり，性同一性障害の人については，「いる」3.3%，「そうかもしれない人がいる」4.6%と回答していた（図 6）.「いる」，「そうかもしれない人がいる」を足すと「同性愛者」16.3%，「性同一性障害の人」は 8.0%となり，さらに「同性愛者」16.3%と「性同一性障害の人」8.0%を足すと 24.3%が性的マイノリティの人と接触していたことが推測された.

本調査において，性的マイノリティの人と接触機会を持っていた割合は，2017 年度調査の 31.0%と比較すると 6.7 ポイント低い．2016 年度調査は「同性愛，性別を変えた，あるいはそうしようとしている人，性同一障害」とまとめて聞いているので正確な比較は難しいが，ここでは 18.2%となり，比較すると 6.1 ポイント高くなった.

4）身近な人に対する嫌悪感

問 5.1 ～問 5.3 において，身近な人が性的マイノリティである場合の嫌悪感について「あなたの知

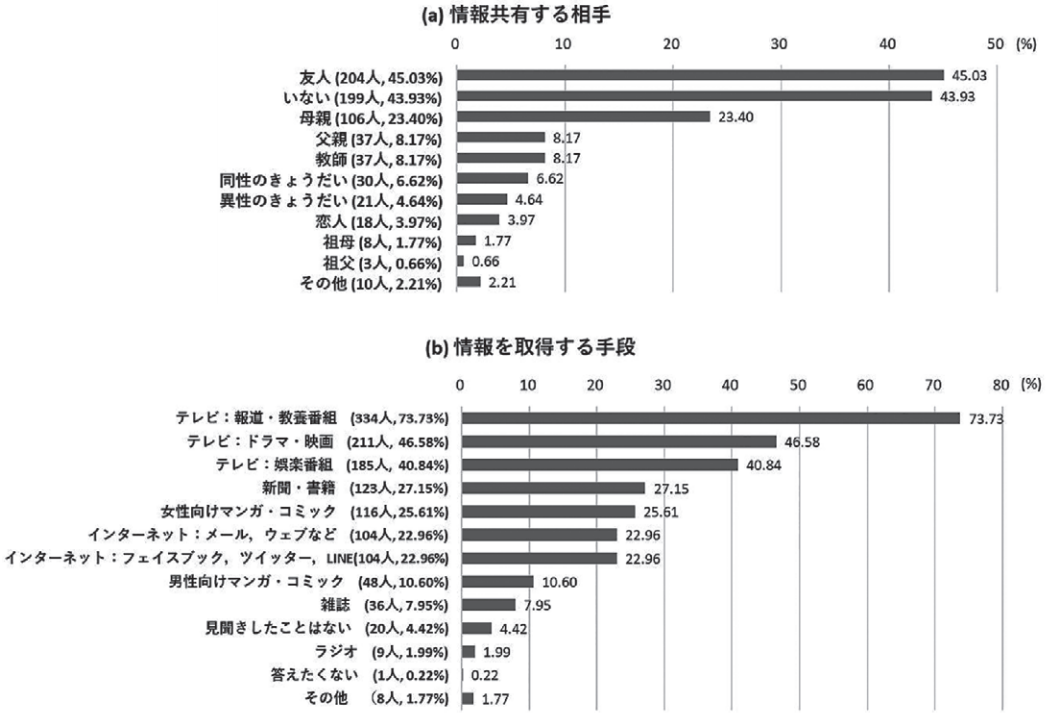

図 5　情報を共有する相手と取得手段に関する集計結果

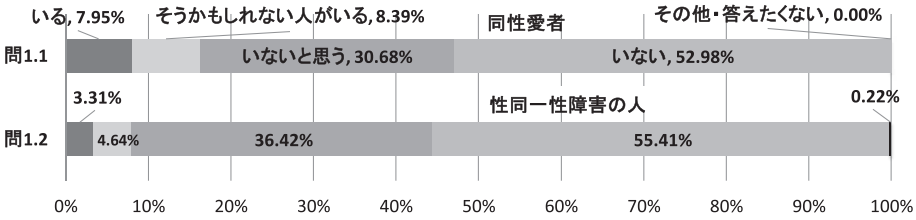

図 6　接触機会に関する集計結果

人」，「同じ大学の人」，「あなたのきょうだい」が同性愛者だった場合，あるいは性同一性障害の人だった場合の気持ちについて聞いている．

結果，「嫌ではない」，「どちらかというと嫌ではない」の合計は，「知人」において，同性愛者だったら 80.8%，性同一性障害の人だったら 85.2% となった．また，同様に「同じ大学の人」が同性愛者だったら「嫌ではない」，「どちらかというと嫌ではない」の合計は 84.3%，性同一性障害の人だったら 86.1% となり，「知人」，「同じ大学の人」については，8 ～ 9 割程度が「嫌ではない」，「どちらかというと嫌ではない」との気持ちを示していることがわかった．

しかし，「あなたのきょうだい」においては，「嫌ではない」，「どちらかというと嫌ではない」の合計は，同性愛者だったら 66.2%，性同一性障害の人だったら 68.0% となった．まとめると「嫌ではない」，「どちらかというと嫌ではない」は 7 割程度となり，「知人」，「同じ大学の人」と比較して平均すると 17.1 ポイント低くなる傾向にあった（図 7）．この傾向は，全国調査の結果と同様であり，関係が近い人ほど嫌悪感を示す人が多くなることを示しているといえる．

嫌悪感に関して，2016 年度調査は同性愛者についてのみ聞いているため，ここでは同性愛者について注目して 3 か年の推移をみたい．「知人」が同性愛者だった場合の肯定的回答，否定的回答の割合は 3 か年にわたってほとんど変化しないことがわかる（図 8a）．

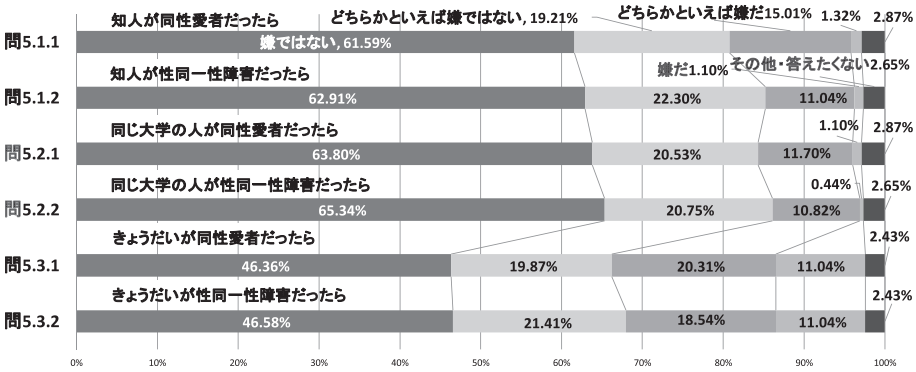

図 7　身近な人に対する嫌悪感に関する集計結果

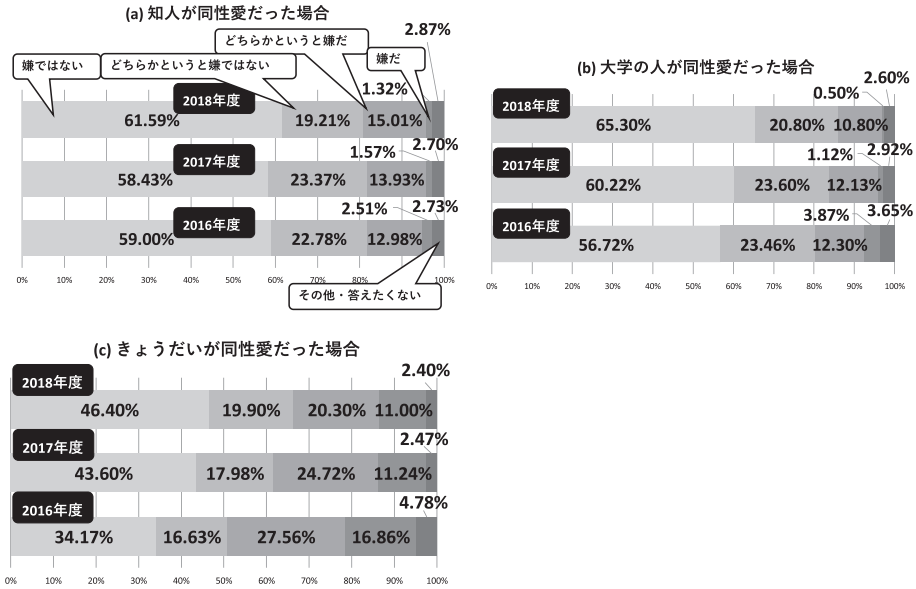

図 8　身近な人が同性愛者だった場合の嫌悪感　3 か年の比較

一方で，「同じ大学の人」および「きょうだい」が同性愛者だった場合については，肯定的回答の割合が年々増加し，否定的回答の割合が年々減少している（図 8b，c）．すなわち，より身近な人が同性愛者だった場合の嫌悪感は減少傾向にあることが推測される．

5）友人（同性）からのカミングアウト

問 6 では，「あなたが仮に，仲の良い同性の友人から「同性愛者」であると告げられたとしたら（カミングアウトされたら），どのような気持ちになると思いますか」と，同性の友人からカミングアウトされた場合の気持ちや態度を「言ってくれてうれしい」，「理解したい」，「かわいそう」，「興味が出てくる」，「寄り添いたい」，「身の危険を感じる」，「気持ち悪い」，「迷惑だ」，「大変なことになった」，「自分なら治してあげられる」，「聞かなかったことにしたい」，「どうでもいい」の 12 項目について，4 件法で聞いている．

結果，本調査において最も回答の割合が多かったものに注目すると，「理解したい」において「当てはまる」68.9%，「自分なら治してあげられる」において「当てはまらない」67.8%，「どうでもいい」において「当てはまらない」64.0%の順になった（図 9）．

2016 年度調査は，カミングアウトされた場合の気持ちや態度を 3 つまで選択するという回答方法であり，回答方法が異なっていることから正確な比較は難しい．よって，2017 年度調査とのみ本調査の回答割合の比較を行う．それによると，「気持ち悪い」，「身の危険を感じる」などの拒否反応を示す回答（「当てはまる」および「やや当てはまる」の合計）の割合は減少し，逆にそうした拒否反応を示さない回答の割合（「やや当てはまらない」および「当てはまらない」の合計）は増加している（図 10a，b）．

一方で，「理解したい」，「言ってくれてうれしい」，「寄り添いたい」などの共感的な態度を示す回答（「当てはまる」）の割合は 2017 年度と比較して 2018 年度は増加している（図 10c–e）．このことより，友人が同性愛者であることに対する嫌悪感は低減し，逆に共感的態度が強化されていることが推測される．

6）同性愛に関する見解

問 7 では，同性愛に関する意見や考えについて，「同性愛は不道徳だ」，「同性に恋愛感情を持たれるのは嫌だ」，「同性愛者と同部屋でもよい」，「同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ」，「同性愛は恥ずかしいことではない」，「同性愛は遺伝的要素が

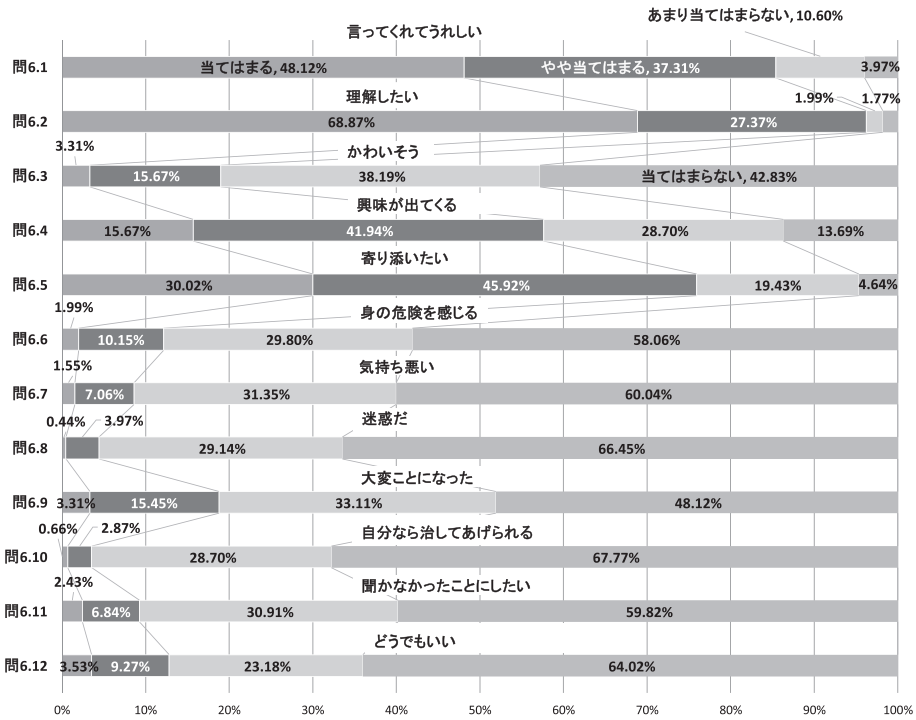

図 9　友人（同性）からのカミングアウトに関する集計結果

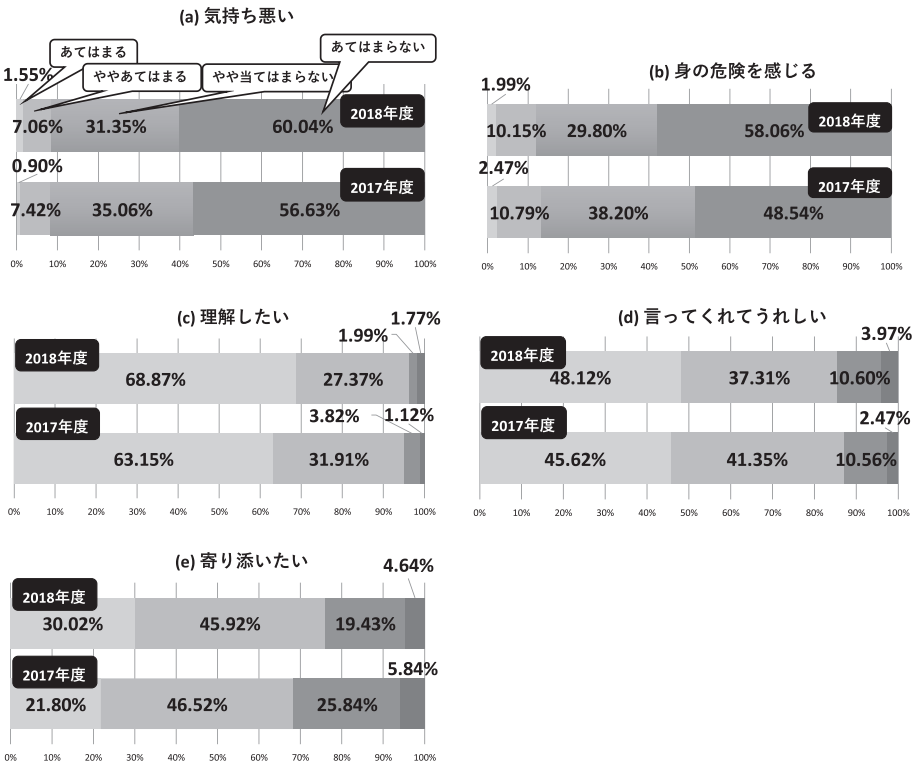

図 10　同性の友人からのカミングアウトに対する応答　2017 年度，2018 年度の比較

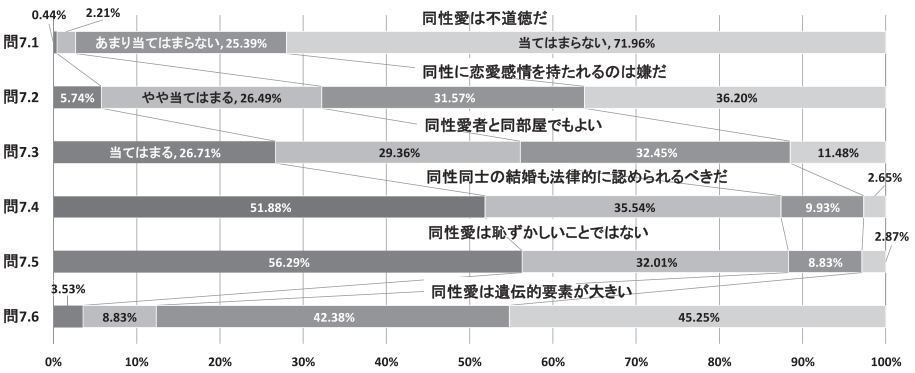

図 11　同性愛に関する見解に関する集計結果

大きい」の 6 項目について，4 件法で聞いている．

結果，本調査において最も回答の割合が多かったものに注目すると，「同性愛は不道徳だ」において「当てはまらない」72.0%，「同性愛は恥ずかしいことではない」において「当てはまる」56.3%，「同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ」において「当てはまる」51.9%の順になった（図 11）．

本設問は 2017 年度調査より新設した設問であり，2017 年度調査と本調査との回答割合の比較を行う．同性愛についての共感的な見解について，その見解に同意するか否かの回答割合を 2017 年度，2018 年度で比較した結果を示す（図 12a–c）．「同性愛は恥ずかしいことではない」および「同性同士の結婚も認めるべきだ」という見解に対して同意する人の割合（「当てはまる」と回答した人の割合）は 2017 年度と比較して 2018 年度は 2 ～ 8 ポイント増加している（図 12a，b）．一方で，「同性愛者と同部屋でもよい」と回答した人の割合は 2017 年度調査，本調査ではほとんど変化していない（図 12c）．

同性愛に関する否定的見解への同意の度合いが，

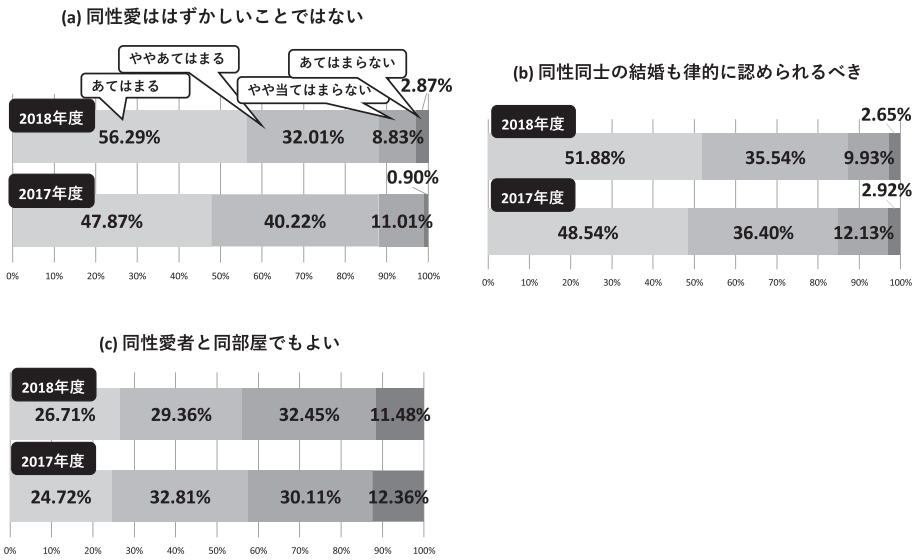

図 12　同性愛に関する肯定的見解への同意の度合い　2017 年度，2018 年度の比較

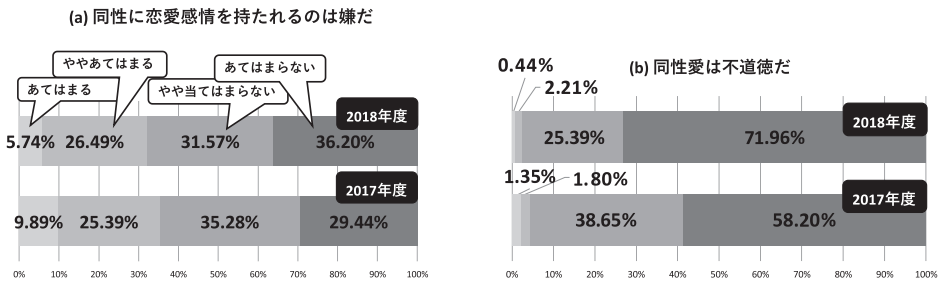

図 13　同性愛に関する否定的見解への同意の度合い　2017 年度，2018 年度の比較

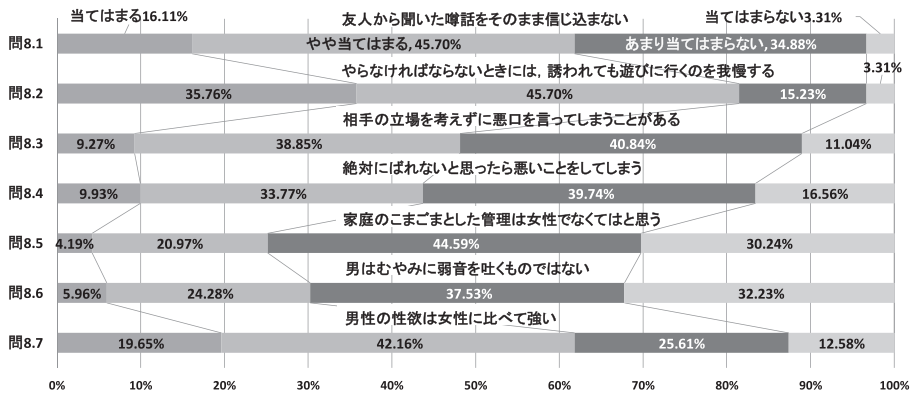

図 14　偏見に関する見解に関する集計結果

2017 年度調査および本調査でどのように変化したかの比較結果を示す（図 13a，b）.「同性に恋愛感情を持たれるのは嫌だ」および「同性愛は不道徳だ」のそれぞれの見解に対して，同意をしない人の割合（「当てはまらない」と回答した人の割合）が，2017 年度調査と比較して本調査は増加していることがわかる．すなわち，同性愛に対して否定的な見解を持つ学生の割合は減少していることが推測される．

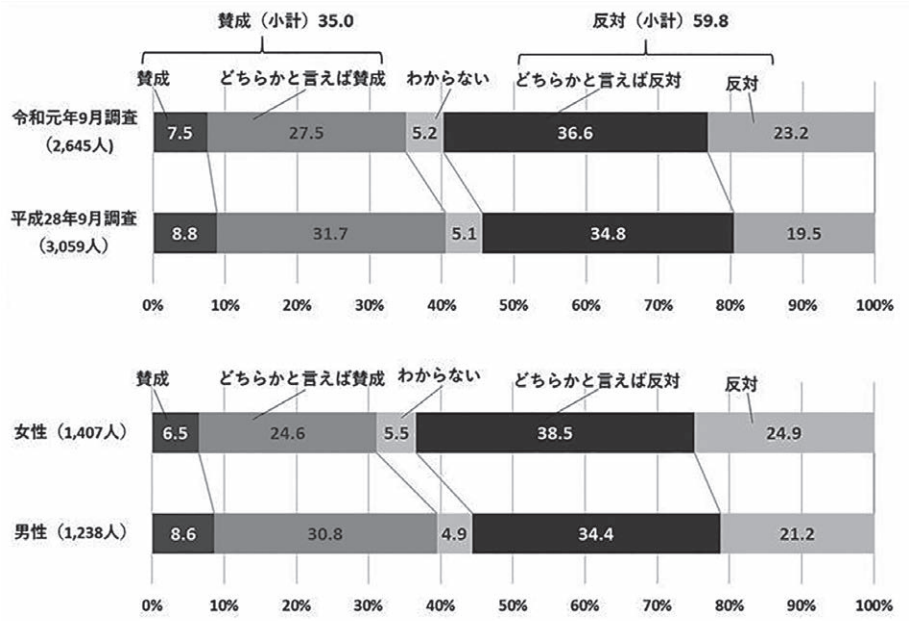

図 15　内閣府男女共同参画社会に関する世論調査（平成 28 年度版，令和元年度版より作成：一部合計が 100％とならないがオリジナルデータを尊重してそのまま表記した）

7）偏見に関する見解

問 8 は，性的マイノリティに対する規範構造を調べるために一般的な道徳観について設問を加えた．設問は 10 項目にわたり，前半の 4 項目は一般的な道徳観について，後半の 6 項目は性に関わる価値観について聞いている．図 14 に集計結果を示す．

8）まとめ

本調査の特徴についてまとめると，以下の 4 点が挙げられる．

①正しい知識を有している割合は，2017 年度調査と比較可能な 4 項目すべてにおいて，本調査の正解率は平均 3.8 ポイント高くなり，性的マイノリティに関する客観的知識を正しく身に付けた学生がわずかであるが増加していることが推測される．②知識習得の意欲については，3 か年を通して本調査が最も肯定的な回答が高い結果となった．これより，性的マイノリティに関する正しい知識を身に付けたいと考える学生の割合は高まりつつあることが推測される．③性的マイノリティの人との接触機会は 24.3％であり，2017 年度調査と比較すると 6.7 ポイント低くなった．④ 3 か年を通して，身近な同性愛者（同じ大学・きょうだい）に対する嫌悪感はわずかであるが漸減傾向にあり，性的マイノリティに対する偏見や差別意識は減少しつつあることが推測される．

2．ジェンダー別集計

ジェンダー論においては，ジェンダー規範が男性よりも女性に対してより抑圧的に作用する面があるため，総じて既存のジェンダー規範や性別役割に対して，女性の方が自覚的であり，非同意を示す傾向があるとされている．内閣府男女共同参画室の令和元年の世論調査では，「夫は外で働き，妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識について，男性は 39.6％が賛成もしくはどちらかといえば賛成であったのに対し，女性は 31.1％であった．男性の約 4 割，女性の約 3 割が性別役割分業に賛成していることになる（反対もしくはどちらかといえば反対は，男性が 55.6％，女性が 63.4％）[4, 5]（図 15）．

同様の傾向は性的マイノリティに対する意識や態度にも見られ，たとえば釜野さおりらの調査[3] では性的マイノリティに対する嫌悪感が男性により強くみられることが指摘されている．また，本調査においてもすでに［第 1 報］，［第 2 報］で性的マイノリティに対する意識や態度さらには関連する知識量の多寡においてもジェンダー差がみられることが明らかになっている．性的マイノリティに対する意識や

態度を考えるとき，ジェンダー変数は常に話題の中心となり，問題を解く鍵の一つと考えられている．

本稿においても引き続き同じ問題意識から，性的マイノリティについて具体的にどのような局面においてジェンダー差がみられるのかを明らかにし，性的マイノリティに対する意識のあり方の解明に寄与したい．以下ではテーマごとに各質問項目に沿って「戸籍上の性別」との関係を検討する．

集計の結果は，客観的知識量については男女別の平均点をｔ検定により有意差の有無を明らかにし，その他の項目については，それぞれカイ２乗検定を行い，Pearson の漸近線有意確率（両側）で5%未満の水準で有意差のあったものを取り上げて検討する．

1）客観的知識量

本調査では，性的マイノリティに関する客観的な知識を問う質問を設け，その正解数に応じて客観的知識量を測っている．内容については本稿「結果1-1)」の問 4.1 ～ 4.5 の通りであるが，質問は全部で５問あり，正解を１点，不正解および「わからない・答えたくない」と回答したものを０点として，合計５点満点として集計した．

結果は図 16 の通りで，男性の平均点が 3.07，女性が 3.37 であった．この男女それぞれの平均点を比較するためにｔ検定をおこなったところ以下のような結果が得られた（図 17）．よって２つの母平均の差の検定によると有意確率（両側）は 0.024（t ＝−2.258）となり，男女の平均点には有意差がある（女性の方が知識量が多い）ことがわかる．

2）当事者との接触機会

性的マイノリティに対する意識や態度については，性別同様に当事者と実際に接した経験があるかどうかが重要な要素になっているといわれてきた[6,7]．性的マイノリティに対してメディアで流布されるカリカチュア化されたイメージや，根拠に乏しい噂レベルを越えないイメージと，実際のリアルな接触とでは本人に与える影響が異なってくるのは当然のことである．実際そのような機会は，男女では差があるだろうか．ここでは特に同性愛者と性同一性障害の人との接触機会の設問（問 1.1 および問 1.2）を取り上げ，男女差を比較した．

結果，図 18，19 の通り，ともに有意差がみられ，性的マイノリティと接した経験は，同性愛者，性同一性障害の人ともに，女性の方が多いことが分かった．

グループ統計量

戸籍上の性別		度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
知識合計点	男性	135	3.07	1.339	.115
	女性	310	3.37	1.293	.073

図 16　客観的知識の男女別平均点

独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
									差の 95% 信頼区間	
		F	有意確率	t	df	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	下限	上限
知識合計点	等分散が仮定されている	.033	.856	−2.258	443	.024	−.304	.135	−.569	−.039
	等分散が仮定されていない			−2.226	247.121	.027	−.304	.137	−.573	−.035

図 17　男女別平均点についてのｔ検定

			同性愛				合計
			いない	いないと思う	そうかもしれない人がいる	いる	
戸籍上の性別	男性	度数	85	37	10	4	136
		戸籍上の性別の％	62.50%	27.21%	7.35%	2.94%	100.00%
	女性	度数	153	102	28	32	315
		戸籍上の性別の％	48.57%	32.38%	8.89%	10.16%	100.00%
合計		度数	238	139	38	36	451
		戸籍上の性別の％	52.77%	30.82%	8.43%	7.98%	100.00%

図 18　男女別にみる同性愛者との接触機会
p＝.013

			性同一性障害				合計
			いない	いないと思う	そうかもしれない人がいる	いる	
戸籍上の性別	男性	度数	91	38	6	1	136
		戸籍上の性別の％	66.91%	27.94%	4.41%	0.74%	100.00%
	女性	度数	158	127	15	14	314
		戸籍上の性別の％	50.32%	40.45%	4.78%	4.46%	100.00%
合計		度数	249	165	21	15	450
		戸籍上の性別の％	55.33%	36.67%	4.67%	3.33%	100.00%

図 19　男女別にみる性同一性障害の人との接触機会
p＝.005

			話をしたことがある相手（同性のきょうだい）		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	134	2	136
		戸籍上の性別の％	98.53%	1.47%	100.00%
	女性	度数	287	28	315
		戸籍上の性別の％	91.11%	8.89%	100.00%
合計		度数	421	30	451
		戸籍上の性別の％	93.35%	6.65%	100.00%

図 20　男女別にみる性的マイノリティに関する会話の経験（同性のきょうだい）
p＝.003

			話をしたことがある相手（友人）		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	101	35	136
		戸籍上の性別の％	74.26%	25.74%	100.00%
	女性	度数	147	168	315
		戸籍上の性別の％	46.67%	53.33%	100.00%
合計		度数	248	203	451
		戸籍上の性別の％	54.99%	45.01%	100.00%

図 21　男女別にみる性的マイノリティに関する会話の経験（友人）
p＝.000

ここまでをまとめると，性的マイノリティに対して一定程度影響力を持つとされる客観的知識においても当事者との接触経験においても女性の方が豊富であることがわかる．

3）会話をした相手

われわれは生まれつき特定の考えや価値観をすべて内面化しているとは考えにくい．やはり成長していく過程で他者との交流や外部の情報を受け入れていく中で徐々にそれらを改正していくと考えるのが自然であろう．それを踏まえて考えると，性的マイノリティに関して，意見や情報を交換する相手にはどのような違いがあるだろうか．本稿では調査対象者が，これまで性的マイノリティに関してどのような相手と会話をしてきたかについて質問している（問 2）．有意差の見られた結果は以下のとおりである．これによると，「同性のきょうだい」（図 20）と「友人」（図 21）に関しては女性の方が会話経験が多いことがわかる．他方，回答のなかで男性の方が多かったのは「（会話をした相手が）いない」（図 22）のみであった．当該テーマに関して，意見を交わしたり情報を交換する頻度においても男女の差が浮き彫りとなった．

			話をしたことがある相手（いない）		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	55	81	136
		戸籍上の性別の％	40.44%	59.56%	100.00%
	女性	度数	198	117	315
		戸籍上の性別の％	62.86%	37.14%	100.00%
合計		度数	253	198	451
		戸籍上の性別の％	56.10%	43.90%	100.00%

図 22　男女別にみる性的マイノリティに関する会話の経験（いない）
p＝.001

			女性マンガ		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	122	14	136
		戸籍上の性別の％	89.71%	10.29%	100.00%
	女性	度数	213	102	315
		戸籍上の性別の％	67.62%	32.38%	100.00%
合計		度数	335	116	451
		戸籍上の性別の％	74.28%	25.72%	100.00%

図 23　男女別にみる性的マイノリティを取り扱っているメディアの接触機会（女性マンガ）
p＝.000

			男性マンガ		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	111	25	136
		戸籍上の性別の％	81.62%	18.38%	100.00%
	女性	度数	292	23	315
		戸籍上の性別の％	92.70%	7.30%	100.00%
合計		度数	403	48	451
		戸籍上の性別の％	89.36%	10.64%	100.00%

図 24　男女別にみる性的マイノリティを取り扱っているメディアの接触機会（男性マンガ）
p＝.000

4）接触メディア

同じく，外部の情報や意見に触れる機会として，接触メディアに関しても男女差を比較した（問 3）．結果は以下のとおりである．男女それぞれの「マンガ」（図 23，24）に差があるのは置くとしても，それ以外では「テレビドラマ・映画」（図 25）において，性的マイノリティを取り扱ったものを見聞きしている点に有意差がみられ，女性の方が多く接触していることが分かった．他方，「男性マンガ」以外で男性の回答が多かったものは，ここでも「（見聞きしたことがあるメディアは）ない」（図 26）だけ

			テレビドラマ・映画		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	93	43	136
		戸籍上の性別の％	68.38%	31.62%	100.00%
	女性	度数	148	167	315
		戸籍上の性別の％	46.98%	53.02%	100.00%
合計		度数	241	210	451
		戸籍上の性別の％	53.44%	46.56%	100.00%

図 25　男女別にみる性的マイノリティを取り扱っているメディアの接触機会（テレビドラマ・映画）
p＝.000

			見聞きしたことがあるメディア（ない）		合計
			×	○	
戸籍上の性別	男性	度数	126	10	136
		戸籍上の性別の％	92.65%	7.35%	100.00%
	女性	度数	306	9	315
		戸籍上の性別の％	97.14%	2.86%	100.00%
合計		度数	432	19	451
		戸籍上の性別の％	95.79%	4.21%	100.00%

図 26　男女別にみる性的マイノリティを取り扱っているメディアの接触機会（ない）
p ＝ .040

			知人が同性愛者だったらどう思うか				合計
			嫌ではない	どちらかといえば嫌ではない	どちらかといえば嫌だ	嫌だ	
戸籍上の性別	男性	度数	69	36	25	3	133
		戸籍上の性別の％	51.88%	27.07%	18.80%	2.26%	100.00%
	女性	度数	209	51	43	3	306
		戸籍上の性別の％	68.30%	16.67%	14.05%	0.98%	100.00%
合計		度数	278	87	68	6	439
		戸籍上の性	63.33%	19.82%	15.49%	1.37%	100.00%

図 27　男女別にみる「知人が同性愛者だったらどう思うか」
p＝.009

であった．マスメディアを通じての外部の意見や情報に触れる機会においても男女差は明白である．

5）身近な人が性的マイノリティだったら

経験や知識量などについて男女には上記のような差がみられたが，性的マイノリティに対する意識や価値観についてはどのような違いがみられるだろうか．以下では「身近な人が性的マイノリティだったら（どう思うか）」，「同性の友人から「同性愛者である」と告げられたらどう思うか」，「同性愛に対する意識」，「（一般的な）ジェンダー規範に対する意識」の 4 項目について明らかにしていく（問 5）．

まず，「身近な人が性的マイノリティだったら（どう思うか）」について検討する．ここでは「身近な人」をそれぞれ，「知人」，「同じ大学の人」と分けて，さらに「性的マイノリティ」を「同性愛者」と「性同一性障害の人」に分けて質問した．結果は以下のとおりである．

			知人が性同一性障害の人だったらどう思うか				合計
			嫌ではない	どちらかといえば嫌ではない	どちらかといえば嫌だ	嫌だ	
戸籍上の性別	男性	度数	70	42	20	3	135
		戸籍上の性別の％	51.85%	31.11%	14.81%	2.22%	100.00%
	女性	度数	214	59	30	2	305
		戸籍上の性別の％	70.16%	19.34%	9.84%	0.66%	100.00%
合計		度数	284	101	50	5	440
		戸籍上の性別の％	64.55%	22.95%	11.36%	1.14%	100.00%

図 28　男女別にみる「知人が性同一性障害の人だったらどう思うか」
p＝.002

			同じ大学の人が同性愛者だったらどう思うか				合計
			嫌ではない	どちらかといえば嫌ではない	どちらかといえば嫌だ	嫌だ	
戸籍上の性別	男性	度数	74	39	19	2	134
		戸籍上の性別の％	55.22%	29.10%	14.18%	1.49%	100.00%
	女性	度数	214	54	34	3	305
		戸籍上の性別の％	70.16%	17.70%	11.15%	0.98%	100.00%
合計		度数	288	93	53	5	439
		戸籍上の性別の％	65.60%	21.18%	12.07%	1.14%	100.00%

図 29　男女別にみる「同じ大学の人が同性愛者だったらどう思うか」
p＝.020

			同じ大学の人が性同一性障害の人だったらどう思うか				合計
			嫌ではない	どちらかといえば嫌ではない	どちらかといえば嫌だ	嫌だ	
戸籍上の性別	男性	度数	78	38	17	2	135
		戸籍上の性別の％	57.78%	28.15%	12.59%	1.48%	100.00%
	女性	度数	217	56	32	0	305
		戸籍上の性別の％	71.15%	18.36%	10.49%	0.00%	100.00%
合計		度数	295	94	49	2	440
		戸籍上の性別の％	67.05%	21.36%	11.14%	0.45%	100.00%

図 30　男女別にみる「同じ大学の人が性同一性障害の人だったらどう思うか」
p＝.009

「知人が性的マイノリティだったら（どう思うか）」という質問には，「（マイノリティ＝）同性愛者」，「（マイノリティ＝）性同一性障害の人」ともに有意差がみられ，いずれも男性の方が「嫌だ」「どちらかといえば嫌だ」との回答の割合が高かった（図 27，28）．

さらに「同じ大学の人が性的マイノリティだったら」という質問でも，やはり「同性愛者」，「性同一性障害の人」ともに男性の方が「嫌だ」「どちらかといえば嫌だ」の回答の割合が有意に高かった（図 29，30）．身近な性的マイノリティに対する許容度の違いを想起させる結果である．

			「言ってくれてうれしい」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	8	26	57	45	136
		戸籍上の性別の％	5.88%	19.12%	41.91%	33.09%	100.00%
	女性	度数	9	22	111	173	315
		戸籍上の性別の％	2.86%	6.98%	35.24%	54.92%	100.00%
合計		度数	17	48	168	218	451
		戸籍上の性別の％	3.77%	10.64%	37.25%	48.34%	100.00%

図 31　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」(「言ってくれてうれしい」)
p＝.000

			「理解したい」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	2	6	46	82	136
		戸籍上の性別の％	1.47%	4.41%	33.82%	60.29%	100.00%
	女性	度数	5	3	77	230	315
		戸籍上の性別の％	1.59%	0.95%	24.44%	73.02%	100.00%
合計		度数	7	9	123	312	451
		戸籍上の性別の％	1.55%	2.00%	27.27%	69.18%	100.00%

図 32　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」(「理解したい」)
p＝.012

しかしそうはいっても，他方で明確に「嫌だ」と回答している数は 440 人程度の母集団に対して実数が極めて少ないことは注目に値する．「知人が同性愛者だったらどう思うか」では男性は３名，男女合わせて６名である．また「性同一性障害の人」の場合も男性は３名，男女合わせても５名である．同じく「同じ大学の人が同性愛者だったらどう思うか」では男性は２名（男女合わせて５名），「性同一性障害の人」の場合は男性が２名（女性は０名）となっている．

6）同性の友人から「同性愛者である」と告げられたらどう思うか

次に意識の内容についてより踏み込んだ質問について検討する．ここでは対象を同性愛にしぼり，「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」という質問（問 6）に対し，「言ってくれてうれしい」「理解したい」など，その時の心情について回答を求めた設問について解析を行う．以下はそのうち有意差の見られたものである．

自分は同性愛者であると告げられて，「言ってくれてうれしい」，「理解したい」「寄り添いたい」のように共感的な反応を示す回答は女性に有意に多い（図 31，32，33）．

逆に「迷惑だ」，「どうでもいい」といった否定的な反応を示す回答については，いずれも男性の方が

			「寄り添いたい」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	12	43	51	30	136
		戸籍上の性別の％	8.82%	31.62%	37.50%	22.06%	100.00%
	女性	度数	7	45	157	106	315
		戸籍上の性別の％	2.22%	14.29%	49.84%	33.65%	100.00%
合計		度数	19	88	208	136	451
		戸籍上の性別の％	4.21%	19.51%	46.12%	30.16%	100.00%

図 33　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」(「寄り添いたい」)
p＝.000

			「迷惑だ」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	77	51	7	1	136
		戸籍上の性別の％	56.62%	37.50%	5.15%	0.74%	100.00%
	女性	度数	222	81	11	1	315
		戸籍上の性別の％	70.48%	25.71%	3.49%	0.32%	100.00%
合計		度数	299	132	18	2	451
		戸籍上の性別の％	66.30%	29.27%	3.99%	0.44%	100.00%

図 34　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」(「迷惑だ」)
p＝.040

			「どうでもいい」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	74	41	14	7	136
		戸籍上の性別の％	54.41%	30.15%	10.29%	5.15%	100.00%
	女性	度数	214	64	28	9	315
		戸籍上の性別の％	67.94%	20.32%	8.89%	2.86%	100.00%
合計		度数	288	105	42	16	451
		戸籍上の性別の％	63.86%	23.28%	9.31%	3.55%	100.00%

図 35　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」(「どうでもいい」)
p＝.041

有意に高い結果となった（図 34，35）．

なお，共感的かどうかを一概には判断できない「興味が出てくる」「自分なら治してあげられる」という回答については前者は女性，後者は男性が有意に多いという結果となった（図 36，37）．

ここまでの傾向と同じように，ここでも女性に共感的な男性に否定的な傾向がみられる．

前項と同じく性的マイノリティに対して強い拒否反応を示す回答に注目すると，実数の少なさが特徴的であることが確認できる．たとえば同性の友人から自分が同性愛者であると告げられて「言ってくれてうれしい」と思うかという質問（図 31）に対して「当てはまらない」と回答した男性は８名（男女合わせて 17 名），「迷惑だ」に「当てはまる」と回答したのは男女各１名となっている．他の項目についても否定的な意見を明確に示すものはおしなべて

			「興味が出てくる」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	27	42	49	18	136
		戸籍上の性別の％	19.85%	30.88%	36.03%	13.24%	100.00%
	女性	度数	33	88	141	53	315
		戸籍上の性別の％	10.48%	27.94%	44.76%	16.83%	100.00%
合計		度数	60	130	190	71	451
		戸籍上の性別の％	13.30%	28.82%	42.13%	15.74%	100.00%

図 36　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」（「興味が出てくる」）
p＝.028

			「自分なら治してあげられる」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	80	46	8	2	136
		戸籍上の性別の％	58.82%	33.82%	5.88%	1.47%	100.00%
	女性	度数	225	84	5	1	315
		戸籍上の性別の％	71.43%	26.67%	1.59%	0.32%	100.00%
合計		度数	305	130	13	3	451
		戸籍上の性別の％	67.63%	28.82%	2.88%	0.67%	100.00%

図 37　男女別にみる「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」（「自分なら治してあげられる」）
p ＝ .008

			「不道徳だ」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	87	47	1	1	136
		戸籍上の性別の％	63.97%	34.56%	0.74%	0.74%	100.00%
	女性	度数	237	68	9	1	315
		戸籍上の性別の％	75.24%	21.59%	2.86%	0.32%	100.00%
合計		度数	324	115	10	2	451
		戸籍上の性別の％	71.84%	25.50%	2.22%	0.44%	100.00%

図 38　男女別にみる同性愛者に対する意識（「不道徳だ」）
p＝.017

			「恋愛感情を持たれるのは嫌だ」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	38	34	47	17	136
		戸籍上の性別の％	27.94%	25.00%	34.56%	12.50%	100.00%
	女性	度数	124	109	73	9	315
		戸籍上の性別の％	39.37%	34.60%	23.17%	2.86%	100.00%
合計		度数	162	143	120	26	451
		戸籍上の性別の％	35.92%	31.71%	26.61%	5.76%	100.00%

図 39　男女別にみる同性愛者に対する意識（「恋愛感情をもたれるのは嫌だ」）
p＝.000

			「恥ずかしいことではない」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	6	19	48	63	136
		戸籍上の性別の％	4.41%	13.97%	35.29%	46.32%	100.00%
	女性	度数	5	21	97	192	315
		戸籍上の性別の％	1.59%	6.67%	30.79%	60.95%	100.00%
合計		度数	11	40	145	255	451
		戸籍上の性別の％	2.44%	8.87%	32.15%	56.54%	100.00%

図 40　男女別にみる同性愛者に対する意識（「恥ずかしいことではない」）
p＝.005

			「同部屋でもよい」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	18	49	48	21	136
		戸籍上の性別の％	13.24%	36.03%	35.29%	15.44%	100.00%
	女性	度数	32	98	85	100	315
		戸籍上の性別の％	10.16%	31.11%	26.98%	31.75%	100.00%
合計		度数	50	147	133	121	451
		戸籍上の性別の％	11.09%	32.59%	29.49%	26.83%	100.00%

図 41　男女別にみる「寮生活で同性愛者と同室になること」に対する意識
p＝.004

			「同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ」				合計
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	
戸籍上の性別	男性	度数	2	20	60	54	136
		戸籍上の性別の％	1.47%	14.71%	44.12%	39.71%	100.00%
	女性	度数	8	25	101	181	315
		戸籍上の性別の％	2.54%	7.94%	32.06%	57.46%	100.00%
合計		度数	10	45	161	235	451
		戸籍上の性別の％	2.22%	9.98%	35.70%	52.11%	100.00%

図 42　男女別にみる同性婚に対する意識
p＝.002

少数である．

7）同性愛に対する意識

つづいて一般に同性愛についてどのような意識を有しているかについての設問（問 7）を解析した．「不道徳だ」，「恋愛感情を持たれるのは嫌だ」といった否定的な回答についてはここでも男性が有意に多いという結果が得られた（図 38，39）．

他方，「恥ずかしいことではない」という回答は女性の方が有意に多かった（図 40）．

また調査を実施した A 大学は一年次に 4 人一組の相部屋の全寮制を敷いており，それを踏まえて「（同性愛者と）同部屋でもよいか」という質問もしている．それに対する回答は図 41 の通りで，やはりここにも男女で有意差がみられ，女性に肯定的な回答が多いことが分かる．また同性同士の法律婚の是非という社会問題についても問うているが，これも女性の方が容認の姿勢を示した（図 42）．

8）ジェンダー規範に対する意識

最後は性的マイノリティに限定せず，広く一般的なジェンダー規範についてどのような意識を有しているかを明らかにする．ここでは男性規範，女性規範に対する意識を問う設問として，それぞれ「家庭のこまごまとした管理は女性ではなくてはと思う」（問 8.5）と「男はむやみに弱音を吐くものではない」（問 8.6）に注目した．結果はいずれも男性の方が

			家庭のこまごまとした管理は女性でなくてはと思う」				
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	合計
戸籍上の性別	男性	度数	28	62	37	9	136
		戸籍上の性別の％	20.59%	45.59%	27.21%	6.62%	100.00%
	女性	度数	107	140	58	10	315
		戸籍上の性別の％	33.97%	44.44%	18.41%	3.17%	100.00%
合計		度数	135	202	95	19	451
		戸籍上の性別の％	29.93%	44.79%	21.06%	4.21%	100.00%

図 43　男女別にみるジェンダー規範に対する意識（「家庭のこまごまとした管理は女性でなくてはと思う」）
p＝.008

			男はむやみに弱音を吐くものではない				
			当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	合計
戸籍上の性別	男性	度数	22	48	49	17	136
		戸籍上の性別の％	16.18%	35.29%	36.03%	12.50%	100.00%
	女性	度数	122	122	61	10	315
		戸籍上の性別の％	38.73%	38.73%	19.37%	3.17%	100.00%
合計		度数	144	170	110	27	451
		戸籍上の性別の％	31.93%	37.69%	24.39%	5.99%	100.00%

図 44　男女別にみるジェンダー規範に対する意識（「男はむやみに弱音を吐くものではない」）
p＝.000

ジェンダー規範に肯定的，女性の方が否定的な回答を示した（図 43，44）．

9）まとめ

ここまで客観的知識量，当事者との接触機会，関係性のあるメディアとの接触機会，知人との会話，当事者に対する心情，同性愛に対する意識，一般的なジェンダー意識に分けて，男女の違いについて検討してきた．結果はいずれにおいても男女差が明確に示されることとなった．すなわち，男性の方が性的マイノリティに関する客観的知識に乏しく，当事者との接触機会にも恵まれておらず，友人やメディアを通じた情報や意見に触れる機会も少ない，そして意識においては当事者に対して否定的・拒絶的であることが分かった．このような男性のジェンダー意識は他方で従来のジェンダー規範に対しては肯定的であった．これらはこれまでの本研究（第一報，第二報を参照）の知見と同じ傾向を示している．

ここまで性的マイノリティに対する男性の不寛容さや嫌悪感ばかりが目立つ結果となったが，これはあくまで女性と比べた時の差においてそうである，という点は留意しなければならない．なぜならば，ここに示されたような性的マイノリティに対して嫌悪感をもち不寛容な態度を示す者は，実数において極めて少数であるからである．ここまで示した通り，全体で 450 ほどのサンプルのうち，明確に否定的な姿勢を示す回答は一桁か多くても 10 人台にとどまっていた．本稿で拾い上げた男女差は，ごく少数の数値の中での差を拾い上げたものともいえる．

性的マイノリティに対する意識や態度のジェンダー差については，男性の方が否定的で保守的であることと，しかし明確にこのような姿勢を示す者は極めて少数であること，の 2 点がこのテーマでの知見であるといえる．

3．対象者像

本研究の対象者である 2016 年度～ 2019 年度の A 大学一年生が，性的少数者に対してどのような意識・態度を持っているか／示すかを簡明に表現するために，3 か年にわたるアンケート回答を対象とする主成分分析を実施した．ただし，3 か年にわたる経時変化について，特徴的な変化や傾向がもし存在するのであれば，これも同時に明らかにしたいという意図を持って，3 か年にわたる質問内容で共通している設問の回答のみを解析の対象とした．3 か年の質問紙で共通の設問を図 45 に示す．図 45 における設問番号は，主成分分析実行のために新たに付与した番号である．

上記設問のうち CQ2，CQ3 についてはいずれも性的マイノリティに対して正確な知識を有するか否かを問う問題であり，両設問の回答を点数化後に合算したほうが客観的な知識量についてのより正確な指標となる．そこで，以降は CQ2 と CQ3 の設問を CQ23 としてまとめ，それぞれの回答を点数化後に合計した結果を CQ23 に対する点数化した回答とみなす．ただし, CQ2 は「正しくない」が正答であり，CQ3 は「正しい」が正答であるため，CQ3 については数値の対応を「正しい」が 3 点，「正しくない」が 1 点となるように反転したうえで，合計を計算した．これにより，CQ23 については点数が大きければ性的マイノリティについての客観的な知識を有していると解釈できることとなる．CQ2 と CQ3 を併合して CQ23 とした結果設問数は合計 7 問となり，その回答について主成分分析を行えば第 1 ～第 7 主成分までの 7 つの主成分が得られる．

図 46 に第 1 主成分～第 7 主成分までの各主成分の標準偏差，寄与率および累積寄与率を示す．第 3 主成分までで全データの分散の約 67％が，第 4 主成分までで全データの分散の約 80％が説明可能となっていることから，情報縮約という主成分分析の

設問番号	設問内容	回答選択肢と点数化の方法
CQ1	あなたの近しい友人や知人、親戚や家族など身近な方に同性愛、性別を変えた、あるいはそうしようとしている人、性同一性障害などはいますか。	いる：1 そうかもしれない人がいる：2 いないと思う：3 いない：4 その他・答えなくない：na
CQ2	「日本では、同性愛は精神病とされる」について正しいと思いますか、正しくないと思いますか。以下から１つ選んでください。	正しい：1 わからない：2 正しくない：3 その他・答えたくない：na
CQ3	「日本では、戸籍上の性別を変えることができる」について正しいと思いますか、正しくないと思いますか。以下から１つ選んでください。	正しい：1 わからない：2 正しくない：3 その他・答えたくない：na
CQ4	あなたは、同性愛、性別を変えた方、性同一性障害などについて正しい知識を身につけたいと思いますか。	とてもそう思う：1 思う：2 それほど思わない：3 思わない：4 その他・答えたくない：na
CQ5	＜あなたの知人＞が同性愛だったら、あなたはどう思いますか。あなたの気持ちにもっとも近いものを１つ選んで、チェックを入れてください。	嫌ではない：1 どちらかといえば嫌ではない：2 どちらかといえば嫌だ：3 嫌だ：4 その他・答えたくない：na
CQ6	＜同じ大学の人＞が同性愛だったら、あなたはどう思いますか。あなたの気持ちにもっとも近いものを１つ選んで、チェックを入れてください。	嫌ではない：1 どちらかといえば嫌ではない：2 どちらかといえば嫌だ：3 嫌だ：4 その他・答えたくない：na
CQ7	＜あなたのきょうだい＞が同性愛だったら、あなたはどう思いますか。あなたの気持ちにもっとも近いものを１つ選んで、チェックを入れてください。	嫌ではない：1 どちらかといえば嫌ではない：2 どちらかといえば嫌だ：3 嫌だ：4 その他・答えたくない：na
CQ8	あなたの戸籍上の性別について教えてください。	男性：1 女性：2

図 45　主成分分析で解析対象とした設問（2016 年度～ 2019 年度の 3 か年にわたって共通している設問）

本来の機能が認められる．

図 47 に，得られた 7 つの主成分に対する各設問の因子負荷量を示す．因子負荷量の絶対値が 0.4 以上のものに関しては網掛けを施してある．この因子負荷量から，第 1 主成分～第 7 主成分までの各主成分の意味付けを考えていく．

第 1 主成分：第 1 主成分は CQ5（知人が同性愛だったらどう思うか），CQ6（同じ大学の人が同性愛だったらどう思うか），CQ7（きょうだいが同性愛だったらどう思うか）の 3 つの設問に対していずれも大きな正の因子負荷があることから，知人，同じ大学の人，きょうだいのいずれの場合も拒否反応を示す．ここでは仮に「ホモフォビア（同性愛嫌悪）」成分と名付ける．

第 2 主成分：第 2 主成分は CQ23（性的マイノリティについての知識）および CQ8（戸籍上の性別）の 2 つに対して正の因子負荷を示す．この成分の得点が高ければ性的マイノリティに対する客観的な知識を持っていることを表し，またその性別は女性が多いこともこの結果から分かる．「知識」成分と名付ける．

第 3 主成分：第 3 主成分は CQ1（身近な人に性的マイノリティがいるか）および CQ4（性的マイノリティに対して正しい知識を身に付けたいか）に対して正の応答を示す．この成分が抽出されたことは，身近な人に同性愛者がいない人は性的マイノリティに対する正しい知識を身に付けたいとは思わないという傾向を示すことを意味する．「未知による無関心」成分と名付ける．

第 4 主成分：CQ23（性的マイノリティについての知識）については負の応答を，CQ7（兄弟が同性愛だったらどう思うか）および CQ8（戸籍上の性別）に対しては正の応答を示す．性的マイノリティについての正確な知識がなく，またきょうだいが同性愛

主成分	第１主成分	第２主成分	第３主成分	第４主成分	第５主成分	第６主成分	第７主成分
標準偏差	1.624337	1.040054	0.982018	0.954035	0.862173	0.717004	0.384498
寄与率	0.37692	0.15453	0.13777	0.13003	0.10619	0.07344	0.02112
累積寄与率	0.37692	0.53145	0.66922	0.79925	0.90544	0.97888	1

図 46　各主成分の標準偏差，寄与率および累積寄与率

主成分 / 設問	第１主成分	第２主成分	第３主成分	第４主成分	第５主成分	第６主成分	第７主成分
CQ1	0.232745	-0.188597	0.756716	-0.316750	0.481152	0.076096	0.003555
CQ23	-0.135066	0.659055	0.135900	-0.652768	-0.320499	0.003991	0.009687
CQ4	0.306622	-0.019738	0.512957	0.368903	-0.704303	-0.099779	0.019509
CQ5	0.547259	0.132665	-0.185448	-0.076472	0.093404	-0.377039	-0.701275
CQ6	0.547560	0.136683	-0.206119	-0.067073	0.116838	-0.337508	0.712004
CQ7	0.461372	0.195499	-0.149958	0.073642	0.003753	0.848678	-0.027138
CQ8	-0.146262	0.674675	0.215460	0.567190	0.383850	-0.088950	-0.006384

図 47　各主成分の因子負荷量（3 年分の回答をまとめて主成分分析を実施）

であることに拒否反応を示す．また，このような応答を示すのは女性が多いことが示唆される．「無知によるきょうだい拒否反応」成分と名付ける．

第５主成分：CQ1（身近な人に性的マイノリティがいるか）については正の応答を，CQ4（性的マイノリティに対して正しい知識を身に付けたいか）については負の応答を示す．すなわち，身近に性的マイノリティの人がいないが性的マイノリティに対する正しい知識を身に付けたいという意欲を示す成分である．「良識的反応」成分と名付ける．

第６主成分：CQ1（身近な人に性的マイノリティがいるか）については正の応答を，CQ7（きょうだいが同性愛者だったらどう思うか）に対しては正の応答を示す．すなわち，身近に性的マイノリティの人がいない人であって，きょうだいが同性愛者であることに拒否反応を示す成分である．「未知によるきょうだい拒否反応成分」と名付ける．

第７主成分：CQ5（知人が同性愛者だったらどう思うか）に対しては負の応答を，CQ6（同じ大学の人が同性愛者だったらどう思うか）に対しては正の応答を示す．この成分が抽出されたことは，知人が同性愛者であることは受容するが，同じ大学の人が同性愛者であることは拒否するという姿勢を持つ人が一定数存在することを意味する．ここで注意する必要があるのは，本研究の対象となる回答者が A 大学初年次学生であり，A 大学は初年次において全寮制教育を導入しているため，他大学学生における「同じ大学の人」と A 大学学生が感じる「同じ大学の人」とでは受けとめ方が大きく異なるということである．すなわち，A 大学初年次学生にとっての「同じ大学の人」は，他大学学生にとってのそれと比較して，共同生活のメンバーに近い感覚で受

けとめられていると推測される．したがって，距離感がより遠いと思われる「知人」に対しては倫理的に同性愛者であることを受容するが，距離感がより近い「同じ大学の人」に対しては同性愛者であることを感覚的に拒絶するという反応が発現しても不思議ではない．この成分は「感覚的反応成分」と名付ける．

ここで，主成分分析の結果得られる各主成分の解釈について，一般的な意味での注意を喚起しておきたい．ここで得られた各主成分は，アンケート回答者である学生一人一人が，上記第１主成分から第７主成分までのいずれかの傾向に分類される，という意味での分類項目を提供するものではない．正しい解釈は，学生一人一人が第１主成分～第７主成分までのそれぞれの主成分に対して固有の値（主成分得点）を持ち，それらの７つの値から学生一人一人について，性的マイノリティに対する意識と態度の総合的傾向を判断することができるということである．すなわち，第１主成分～第７主成分は，各人が持つ性的マイノリティに対する意識と態度を特徴づける，直観的な７つの座標軸を提供するものである．

各主成分は上記の意味を持つから，それぞれの主成分の得点（＝各座標軸方向の得点）をアンケート回答者一人一人に対して求め，さらにそれぞれの主成分ごとの平均点を計算したうえで平均点がアンケート実施年度によってどのように推移したかを検討することは，学生の性的マイノリティに対する意識，態度がどのように変化しているかという問いに対する直接的な解答となりうる．以下では，各主成分得点の経年変化を見る目的で，各主成分の得点を年度ごとに全学生に対して求め，そのデータを用いてそれぞれの主成分得点の母平均に年度間で有意な差があるかについて検定を行う．

結果を図 48 に示す．図 48 の最終列では，有意差がない年度間は「≅」で，有意水準 5%で有意差が検出された年度間は不等号で関係を表示した．また，多重比較における有意確率の調整には Holm の方法を使用した．

図 48 から分かるように，学生の性的マイノリティに対する意識，態度に関して，2016 年度～2018 年度の 3 か年にわたる学生の特徴的な変化について，一貫した変化を示す主成分は見当たらなかった．例えば，第１主成分（ホモフォビア成分）は一貫して減少する傾向にあり，これは性的マイノリティに対する拒否の姿勢が低減されつつあることを示すが，統計的な有意性という意味では，2016 年度に対して 2017 年度，2018 年度で第１主成分が減少していることは言えるが，2017 年度，2018 年

主成分得点	年度ごとの平均値			検定（多重比較）結果
	2016 年度	2017 年度	2018 年度	
第 1 主成分得点	0.1693514	-0.01075962	-0.1445359	2016＞2017≅2018
第 2 主成分得点	0.1244368	-0.04422508	-0.07169548	2016＞2017≅2018
第 3 主成分得点	0.1087444	-0.05975706	-0.04259814	2016＞2017≅2018
第 4 主成分得点	-0.1483285	0.1439705	-0.001240907	2017>2018>2016
第 5 主成分得点	-0.03172383	-0.04845736	0.07503025	2018≅2017≅2016
第 6 主成分得点	0.1270128	-0.05018978	-0.06838239	2016>2017≅2018
第 7 主成分得点	0.05421999	-0.02084028	-0.02974734	2016＞2017≅2018

図 48　年度ごとの主成分得点平均検定結果

度間には統計的に有意な差異は見出されなかった．この結果は，３年間という連続した短い期間で同一年齢層を対象とした場合に，性的マイノリティに対する意識が急激に変化することはないということ，および意識変化はより長い期間にわたって漸近的に生じるものであることを示唆する．

学生の性的マイノリティに対する意識，態度に関して年度ごとの特徴についての知見を主成分分析の観点から調べることを目的として，年度ごとに独立したデータとして主成分分析も行った．2016 年度と 2017 および 2018 年度とでは，第４主成分および第５主成分が入れ替わっているが，基本的な主成分の構造について３か年にわたって大きな変化は見られなかった．また各年度の主成分の構造は，図 17 に示した３か年分のデータについて得られた主成分の構造と同一であることが判明した．この結果は，上述のように性的マイノリティに対する意識が急激に変化することはないということを示唆している．

まとめと考察

性的マイノリティを論ずるとき，われわれは誤った問題構成をしがちである．それはマイノリティの人々のみに焦点を当て考察を進めてしまうことである．もちろん当事者像を明らかにすることは大切である．性的マイノリティはどれくらいの割合でいて，どのようなことを考え，そして生活上，どのような不自由を経験しているのか，当事者でなければわからない彼らの隠れたリアリティを析出することは現実理解のためには第一のそして不可欠な要件である．

しかし，他方で決して見過ごしてはいけないのは，彼らを「マイノリティ」にしてきた社会の側の考察である．社会学者のブルームとセルズニックは「マイノリティ」を「数ではなく従属的境遇という社会的事実をさす」と指摘している[8]．支配階級は数の上では少数であるが，彼らのことを決して「マイノリティ」とは呼ばない．単なる数的な少なさに抑圧が加わったとき，それは「マイノリティ」と変化し，そこには必ず社会的な影響が作用しているのだ．それは多数派の偏見かもしれないし，社会を営んでいく上での経済的な判断がそれにあたるかもしれない．しかしこれらはいくら当事者の特性を調べたところで（責任を追及したところで）明らかになるものではない．

性的マイノリティについて考察することは，同時に多数派自身を問い質すことでもあるのだ．性的マイノリティの人々が仮にクローゼットの中に閉じこもっているとしたら，第一に問われるべきはクローゼットの中の人々ではなく，彼らをしてそうさせしめている社会の特殊性の方こそ，なのである．その特徴をできるだけ客観的に明らかにし，その問題点を改めていくことが「マイノリティ」との共生を可能とする契機といえよう．この作業は本来ならば強制的異性愛を前提とする社会的文化的構造にまで遡るべきものである．がしかし，本稿では観察可能な現実をできるだけ客観的に把握することをまずは第一に行うべきと考え，それを第一の目的とした．

上記目的を達するために A 大学の協力のもと第一学年の全数調査を実施した．これにより，自由回答の形式をとったが，調査を行った３年とも 75% 以上の回収率を得られ（図１参照），その偏りは極力排除することができた．また同様の調査を３か年にわたって実施したことで，ほぼ同じような特性のサンプルを得ることができた．調査を行った３年間 A 大学の入試制度は大きく変わることなく，入学してくる学生にも大きな変化は生じてはいない．また３年間の回答傾向に大きな変化が見られないことは，このデータがそれほど特異なものでもないことを示しているともいえよう．つまり，これによりある程度の規模の安定的な信頼できる数値が得られたと考えられる．これらは従来の質問紙を配布する方法を改め，インターネットを活用することで，回答のしやすさのみならず資金面でも人材面でも可能になったことである．

この作業によって得られた結果は，ここまでで述べたとおりであるが，その中でも特徴的であった点を３点指摘したい．

まず第１点目は，ジェンダー差に注目すると，性的マイノリティに対して男性が否定的，女性が肯定的な意識や態度を示していることである．この傾向は３年間でもほぼ変化なく，さらに客観的知識量や当事者との接触機会など，当事者に対する意識や態度に影響を及ぼすと考えられる事柄についても同様の有意差がみられた．当事者に対するまなざしはその構築の時点からジェンダー差がみられることが明らかになった．ただ，この事実には一定の留保が必

要である．これらについて必ずしもジェンダーがすべての説明変数であるとは限らず，客観的知識量や当事者との接触機会，あるいは友人関係などが説明変数となっている可能性が否定できないからだ．データに現れたジェンダー差は，それらの経験が性別によって偏っているだけという可能性も否定できない．このことについては，さらなる考察を必要とする，が紙幅の都合で稿を改めることとする．

2点目として指摘したいのは，上記のようなジェンダー差はあるものの，男性であっても性的マイノリティに対してはっきりと拒否や嫌悪を示すものは極めて少数であることである．例えば「身近な人が同性愛者だったら（どう思うか）」という質問に「嫌だ」と回答した男性は133人中3人（2.3%）である（図27参照）．「同性の友人から『同性愛者である』と告げられたらどう思うか」という質問に対し「迷惑だ」の回答文に「当てはまる」としたのは136人中1人（0.7%）なのである（図34参照）．性的マイノリティに対する拒否感や嫌悪感にみられるジェンダー差はごく少数の中での差であることは強調されるべき点である．

そして第3点目であるが，対象者像についての主成分分析で明らかになった通り，抽出された7つの主成分のうち「ホモフォビア成分」が減少傾向にあるという点である（図48参照）．近年，性的マイノリティの人々やそのことについての話題は日常的にメディアに登場するようになり，LGBTという用語も瞬く間に一般に浸透した．性的マイノリティに対する認知度の普及は他方で偏見や好奇のまなざしの拡大も懸念させたが，数字で理解する限り，むしろ解消の方向に進んでいるといえそうである．同様に当事者に関する正しい知識の習得への意欲も毎年75%以上の水準で年々増加傾向にある．このことも性的マイノリティに対する認知の広がりが偏見や好奇の視線ではなく，事実をありのままに理解しようとする志向性の上昇であることを物語っている．

参議員法務委員会調査室の中西絵里は電通，博報堂，連合の大規模調査を引きながら，「LGBTの人口規模については，約8%」とまとめている[9]．これに対し，本調査では「知人が同性愛だったら（どう思うか）」という質問に対する「嫌だ」と回答が，男女合わせても439人中6名（1.4%）であった（図27）．もちろん単純な比較はできないが，この数字が示しているのは性的マイノリティに対して不寛容な人こそマイノリティである，という事実である．われわれは性的マイノリティとの共生を考えるとき，多数派の側の偏見や好奇のまなざしを恐れ，それらから彼らを守ることを第一に考える．特に大学という教育機関においてはその傾向は強い．しかし，性的マイノリティの一般的な割合が約8%であるのに対し，彼らにあからさまに拒絶や嫌悪を示すのは今回の調査では1.4%なのである．数値だけを比較するなら性的マイノリティのわずか5分の1以下である．さらにその割合は決して増加はしておらず，むしろ減少傾向をにおわせるものとなっている．そうだとすると，一体われわれは何を恐れていたのだろう．全体の8%の性的マイノリティを嫌悪するそのさらに5分の1の人々のため（だけ）に，われわれの思考や行動が縛られているとしたら，それは生産的とは言えない．

もちろん当事者を傷つけない（傷つけさせない）配慮は十分に必要だ．しかしそのような人々の影響だけを恐れるのではなく，むしろそのようなごく少数から発せられる偏見や嫌悪に安易に同調しない社会構造や文化的風土を構築することも同様に重要である．刺激的で感情に訴えかけるような言説に左右されない健全な揺るぎない価値観を涵養すること，それを裏付ける客観的な知識の習得を促しサポートすること，そして独善に陥らないよう常に外部に開かれた感性を磨けるような場と方法を制度的に準備すること．これらを，拒絶や嫌悪感に「やや同調」してしまう10～15%程の人々や，この問題について「もっと正しい知識を身に付けたい」とする75%以上の人々に向けた共生への取り組みとして提示することこそ求められているのではないだろうか．

本稿は2018年度の調査の概要をまとめることを主たる目的としているため，知見の追求には不十分な点がみられる．ジェンダー差の項では一定の有意差が示されたが，当事者に対する意識の規定要因に関しては，まだ当事者との接触機会や情報共有の相手など考慮すべき要素が多く，これらを合わせた考察とはなっていない．また対象者像の分析では対象者の意識や態度を特徴づける7つの軸が析出されたが，それらを説明変数としたさらなる考察が次の課題として残されている．これらについては，稿を改めて考察することとしたい．

また本稿は３年間の調査と集計を通じた「経時的な変化」についても若干の言及を行ってきた．しかし当然社会意識に関する変化をわずか３年で論じ切るのは難しく，数字の変化の解釈に不明瞭さが残った．このことについてはさらに調査年限を２年延長し，合計５年間の調査とすることで一定の回答を試みたい．

謝辞　本調査および研究の実施に際しては「昭和大学富士吉田教育部の共同研究費」より研究支援を受けている．ここに謝意を記す．

利益相反

本研究に関し，開示すべき利益相反はない．

文　献

1）須長史生，小倉　浩，堀川浩之，ほか．セクシュアル・マイノリティに対する大学生の意識と態度（第１報）　インターネットを活用した調査研究．昭和学士会雑誌．2018;**77**:530–545.
2）須長史生，小倉　浩，堀川浩之，ほか．性的マイノリティに対する大学生の意識と態度（第２報）　インターネットを活用した調査研究．昭和学士会雑誌．2019;**79**:734–751.
3）釜野さおり，石田　仁，風間　孝，ほか．性的マイノリティについての意識．2015年全国調査報告書．科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」．2016.（2020年1月30日アクセス）http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf
4）内閣府男女共同参画局．男女共同参画社会に関する世論調査．2019年９月．集計表．（2020年３月19日アクセス）https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/4.html
5）内閣府男女共同参画局．男女共同参画社会に関する世論調査．2016年９月．集計表．（2020年３月19日アクセス）https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-danjo/4.html
6）福岡欣治．大学生の性同一性障害に関する経験と認識　医療事務職になりうる学生に注目して．川崎医療福祉会誌．2015;**25**:183–192.
7）日向桂子，高田谷久美子，近藤洋子．看護学生と他領域の学生の性同一性障害に対する態度や知識と性差観に関する研究．山梨大看会誌．2007;**6**:39–44.
8）Broom L, Selznick P, Broom D．今田高俊監訳．社会学．原著第７版．東京: ハーベスト社; 1987.
9）中西絵里．LGBTの現状と課題：性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き．立法と調査．2017;**394**:3–17.（2020年３月19日アクセス）https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2017pdf/20171109003.pdf

（添付資料）質問文と回答別割合（%）

問1　あなたの近しい友人や知人，親戚や家族など身近な方に以下に挙げる人はいますか.

1.1 同性愛者

いる〔7.95%〕，そうかも知れない人がいる〔8.39%〕，いないと思う〔30.68%〕，いない〔52.98%〕，その他・答えたくない〔0.00%〕

1.2 性同一性障害の人

いる〔3.31%〕，そうかも知れない人がいる〔4.64%〕，いないと思う〔36.42%〕，いない〔55.41%〕，その他・答えたくない〔0.22%〕

問2　つぎのうち，あなたがこれまで性的マイノリティに関して話をしたことがある人は誰ですか．当てはまる人全てにチェックを入れて下さい．（複数選択可）

父親〔37 人，8.17%〕，母親〔106 人，23.40%〕，祖父〔3 人，0.66%〕，祖母〔8 人，1.77%〕，同性のきょうだい〔30 人，6.62%〕，異性のきょうだい〔21 人，4.64%〕，友人〔204 人，45.03%〕，恋人〔18 人，3.97%〕，教師〔37 人，8.17%〕，その他〔10 人，2.21%〕，いない〔199 人，43.93%〕，答えたくない〔0 人，0%〕

問3　あなたは，テレビ，新聞，書籍，雑誌，ラジオ，マンガ，インターネットなどで，同性愛，性別を変えた，性同一性障害などが扱われているのを見聞きしたりしたことがありますか．当てはまるもの全てにチェックを入れて下さい．（複数選択可）

見聞きしたことはない〔20 人，4.42%〕，テレビ（報道・教養番組）〔334 人，73.73%〕，テレビ（娯楽番組）〔185 人，40.84%〕，テレビドラマ・映画〔211 人, 46.58%〕，新聞・書籍〔123 人, 27.15%〕，雑誌〔36 人, 7.95%〕，ラジオ〔9 人，1.99%〕，女性向けマンガ・コミック〔116 人，25.61%〕，男性向けマンガ・コミック〔48 人，10.60%〕，インターネット（メール，ウェブなど）〔104 人，22.96%〕，インターネット（フェイスブック，ツイッター，LINE など）〔104 人，22.96%〕，答えたくない〔1 人，0.22%〕，その他〔8 人，1.77%〕

問4　以下は「同性愛」および「性同一性障害」に関する知識を問う問題です．以下の記述は正しいと思いますか，正しくないと思いますか．各記述に対して解答を一つ選んでください．

4.1「性同一性障害と同性愛は同じである」（正解：「正しくない」）

正しい〔3.31%〕，正しくない〔73.95%〕，わからない〔22.30%〕，その他・答えたくない〔0.44%〕

4.2「日本では，同性愛は精神病とされる」（正解：「正しくない」）

正しい〔6.18%〕，正しくない〔63.13%〕，わからない〔30.68%〕，その他・答えたくない〔0.00%〕

4.3「日本では，戸籍上の性別を変えることができる」〔正解：「正しい」）

正しい〔56.07%〕，正しくない〔14.35%〕，わからない〔29.36%〕，その他・答えたくない〔0.22%〕

4.4「性同一性障害とは性自認と身体的性別が一致していない状態につけられた疾患名である」（正解：正しい」）

正しい〔75.94%〕，正しくない〔2.43%〕，わからない〔21.41%〕，その他・答えたくない〔0.22%〕

4.5「性同一性障害は手術によって完治できる」（正解：「正しくない」）

正しい〔3.31%〕，正しくない〔56.73%〕，わからない〔39.29%〕，その他・答えたくない〔0.66%〕

問5　あなたは，同性愛者，性別を変えた方，性同一性障害などについて正しい知識を身につけたいと思いますか.

とてもそう思う〔36.20%〕，思う〔47.68%〕，それほど思わない〔12.80%〕，思わない〔2.43%〕，その他・答えたくない〔0.88%〕

5.1「あなたの知人」が「同性愛者」だったら，あるいは「性同一性障害の人」だったら，あなたはどう思いますか．あなたの気持ちにもっとも近いものを 1 つ選んでください.

5.1.1 同性愛者

嫌ではない〔61.59%〕，どちらかといえば嫌ではない〔19.21%〕，どちらかといえば嫌だ〔15.01%〕，嫌だ〔1.32%〕，その他・答えたくない〔2.87%〕

5.1.2 性同一性障害の人

嫌ではない〔62.91%〕，どちらかといえば嫌ではない〔22.30%〕，どちらかといえば嫌だ〔11.04%〕，嫌だ〔1.10%〕，その他・答えたくない〔2.65%〕

5.2「同じ大学の人」が「同性愛者」だったら，あるいは「性同一性障害の人」だったら，あなたはどう思いますか．あなたの気持ちにもっとも近いものを１つ選んでください．

5.2.1 同性愛者
嫌ではない〔63.80%〕，どちらかといえば嫌ではない〔20.53%〕，どちらかといえば嫌だ〔11.70%〕，嫌だ〔1.10%〕，その他・答えたくない〔2.87%〕

5.2.2 性同一性障害の人
嫌ではない〔65.34%〕，どちらかといえば嫌ではない〔20.75%〕，どちらかといえば嫌だ〔10.82%〕，嫌だ〔0.44%〕，その他・答えたくない〔2.65%〕

5.3「あなたのきょうだい」が「同性愛者」だったら，あるいは「性同一性障害の人」だったら，あなたはどう思いますか．あなたの気持ちにもっとも近いものを１つ選んでください．

5.3.1 同性愛者
嫌ではない〔46.36％〕，どちらかといえば嫌ではない〔19.87％〕，どちらかといえば嫌だ〔20.31％〕，嫌だ〔11.04%〕，その他・答えたくない〔2.43%〕

5.3.2 性同一性障害の人
嫌ではない〔46.58％〕，どちらかといえば嫌ではない〔21.41％〕，どちらかといえば嫌だ〔18.54％〕，嫌だ〔11.04%〕，その他・答えたくない〔2.43%〕

問６　あなたが仮に，仲の良い同性の友人から「同性愛者」であると告げられたとしたら（カミングアウトされたとしたら），どのような気持ちになると思いますか．以下のそれぞれの気持ちについて，最も当てはまるものをそれぞれ１つ選んでください．

6.1 言ってくれてうれしい
当てはまる〔48.12%〕，やや当てはまる〔37.31%〕，あまり当てはまらない〔10.60%〕，当てはまらない〔3.97%〕

6.2 理解したい
当てはまる〔68.87%〕，やや当てはまる〔27.37%〕，あまり当てはまらない〔1.99%〕，当てはまらない〔1.77%〕

6.3 かわいそう
当てはまる〔3.31%〕，やや当てはまる〔15.67%〕，あまり当てはまらない〔38.19%〕，当てはまらない〔42.83%〕

6.4 興味が出てくる
当てはまる〔15.67%〕，やや当てはまる〔41.94%〕，あまり当てはまらない〔28.70%〕，当てはまらない〔13.69%〕

6.5 寄り添いたい
当てはまる〔30.02%〕，やや当てはまる〔45.92%〕，あまり当てはまらない〔19.43%〕，当てはまらない〔4.64%〕

6.6 身の危険を感じる
当てはまる〔1.99%〕，やや当てはまる〔10.15%〕，あまり当てはまらない〔29.80%〕，当てはまらない〔58.06%〕

6.7 気持ち悪い
当てはまる〔1.55%〕，やや当てはまる〔7.06%〕，あまり当てはまらない〔31.35%〕，当てはまらない〔60.04%〕

6.8 迷惑だ
当てはまる〔0.44%〕，やや当てはまる〔3.97%〕，あまり当てはまらない〔29.14%〕，当てはまらない〔66.45%〕

6.9 大変なことになった
当てはまる〔3.31%〕，やや当てはまる〔15.45%〕，あまり当てはまらない〔33.11%〕，当てはまらない〔48.12%〕

6.10 自分なら治してあげられる
当てはまる〔0.66%〕，やや当てはまる〔2.87%〕，あまり当てはまらない〔28.70%〕，当てはまらない〔67.77%〕

6.11 聞かなかったことにしたい
当てはまる〔2.43%〕，やや当てはまる〔6.84%〕，あまり当てはまらない〔30.91%〕，当てはまらない〔59.82%〕

6.12 どうでもいい
当てはまる〔3.53%〕，やや当てはまる〔9.27%〕，あまり当てはまらない〔23.18%〕，当てはまらない〔64.02%〕

問7　以下の「同性愛に関する」意見や考えに対してあなたはどのように感じていますか．次のそれぞれの項目について当てはまるものをお答えください．

7.1 同性愛は不道徳だ
当てはまる〔0.44%〕，やや当てはまる〔2.21%〕，あまり当てはまらない〔25.39%〕，当てはまらない〔71.96%〕

7.2 同性に恋愛感情を持たれるのは嫌だ
当てはまる〔5.74%〕，やや当てはまる〔26.49%〕，あまり当てはまらない〔31.57%〕，当てはまらない〔36.20%〕

7.3 同性愛者と同部屋でもよい
当てはまる〔26.71%〕，やや当てはまる〔29.36%〕，あまり当てはまらない〔32.45%〕，当てはまらない〔11.48%〕

7.4 同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ
当てはまる〔51.88%〕，やや当てはまる〔35.54%〕，あまり当てはまらない〔9.93%〕，当てはまらない〔2.65%〕

7.5 同性愛は恥ずかしいことではない
当てはまる〔56.29%〕，やや当てはまる〔32.01%〕，あまり当てはまらない〔8.83%〕，当てはまらない〔2.87%〕

7.6 同性愛は遺伝的要素が大きい
当てはまる〔3.53%〕，やや当てはまる〔8.83%〕，あまり当てはまらない〔42.38%〕，当てはまらない〔45.25%〕

問8　以下はあなたの意見や考えについてお聞きします．次のそれぞれの項目について当てはまるものをお答えください．

8.1 友人から聞いた噂話をそのまま信じ込まない
当てはまる〔16.11%〕，やや当てはまる〔45.70%〕，あまり当てはまらない〔34.88%〕，当てはまらない〔3.31%〕

8.2 どうしてもやらなければならないことがあるときには誘われても遊びに行くのを我慢する
当てはまる〔35.76%〕，やや当てはまる〔45.70%〕，あまり当てはまらない〔15.23%〕，当てはまらない〔3.31%〕

8.3 相手の立場を考えずに悪口を言ってしまうことがある
当てはまる〔9.27%〕，やや当てはまる〔38.85%〕，あまり当てはまらない〔40.84%〕，当てはまらない〔11.04%〕

8.4 絶対にばれないと思ったら悪いことをしてしまう
当てはまる〔9.93%〕，やや当てはまる〔33.77%〕，あまり当てはまらない〔39.74%〕，当てはまらない〔16.56%〕

8.5 家庭のこまごまとした管理は女性でなくてはと思う
当てはまる〔4.19%〕，やや当てはまる〔20.97%〕，あまり当てはまらない〔44.59%〕，当てはまらない〔30.24%〕

8.6 男はむやみに弱音を吐くものではない
当てはまる〔5.96%〕，やや当てはまる〔24.28%〕，あまり当てはまらない〔37.53%〕，当てはまらない〔32.23%〕

8.7 男性の性欲は概して女性に比べて強い
当てはまる〔19.65%〕，やや当てはまる〔42.16%〕，あまり当てはまらない〔25.61%〕，当てはまらない〔12.58%〕

（調査対象となった大学との取り決めにより，項目を一部削除しています）

THE AWARENESS AND BEHAVIOR OF UNIVERSITY STUDENTS TOWARD SEXUAL MINORITIES: PART 3
―SUMMARY OF THE TOTALIZATION RESULT OF A THREE-YEAR QUESTIONNAIRE SURVEY―

Fumio SUNAGA*[1)], Hiroshi OGURA[1)], Keiko MASAKI[2)],
Norimitsu KURATA[1)] and Hiroyuki HORIKAWA[1)]

Abstract —— This study forms the third part of our research on university students' awareness and attitude toward sexual minorities, which started in 2016, with the aim to determine how young people aged 18 to young 20s feel about sexual minorities. Here, we report the results of the third questionnaire survey conducted via the internet in 2018 and summarize the results obtained in the three surveys conducted every year from 2016 to 2018. Summarizing the results, we found that (a) more participants have common knowledge about sexual minority people compared to the previous year's report, (b) the percentage of students who want to obtain precise knowledge on sexual minority people increased throughout the three years, and (c) the percentage of students who have a feeling of disgust toward their sexual minority people decrease over the three years. This study also reports the results of principal component analyses (PCA) performed on the data obtained by the surveys through 2016 to 2018. The characteristic responses of the participants regarding sexual minorities was clarified via PCA. Chi-squared tests were also performed to examine how male participants and female participants differed from each other in their response to some questions.

Key words: sexual minority, cognitive awareness, gender bias

〔Received March 21, 2020：Accepted April 7, 2020〕

[1)] Faculty of Arts and Sciences at Fujiyoshida, Showa University
[2)] Office of Academic Affairs, Showa University
* To whom corresponding should be addressed